

## 周南のナベツル ツルと「共に」生きる里の挑戦

山口県周南市 市長  
木村健一郎氏

本日は大変貴重な機会を与えていただきましてありがとうございます。周南市長の木村健一郎です。よろしく願いいたします。先にお話しいただいた韓国順天市、出水市さんと比べますと、渡来するツルの数は少ないですが、本市にも毎年ツルがやって来ます。今日は、「ツルと共に生きる里の挑戦」と題して、周南市の取り組みを紹介させていただきます。

さて、最初に周南市の概要をお話します。地図で示しております山口県の東部に位置する周南市は、平成15年に、徳山、新南陽、熊毛、鹿野という2市2町が合併してできました(図-1)。人口約14万8千人、面積は東京23区、シンガポール、琵琶湖とほぼ同じ程度の約656平方kmのまちであります。



図-1

臨海部には、製造品出荷額1兆3千億円を誇る、石油化学コンビナート群を中心とした工業地帯が広がっています。このコンビナート夜景は、日本六大工場夜景にも数えられています。今の時期から年明けにかけては、本市の中心部では、ツリー祭も行われまして、工場夜景と合わせ、光り輝く街並みを堪能していただけます。周南市の玄関口、徳山駅に、先日エヴァンゲリオン新幹線がお目見えしました。実はエヴァンゲリオンで有名な漫画家、アニメーターの貞本義行さんは、周南市の出身であります。現在、新しい駅ビルの建設が、平成30年のオープンに向けて、新たな賑わいづくりの拠点として進められているところです。平成25年9月、本市の徳山動物園にスリランカ国との国交樹立60周年を記念して、2頭の象がやってきました。周南市は、童謡「ぞうさん」の作者まど・みちおさんの出身地であることから、動物園にゾウは欠かせません。

また、本市の先進的な取り組みとして、コンビナートで発生した水素を活用した「水素先進都市周南」を推進しています。水素の国内有数の生産地として様々な取り組みを行っています。たとえば、ロケットの燃料となる液化水素は、本市でつくられています。本年8月には、中四国エリア初となる液化水素ステーションもオープンしました(図-2)。左側が私、私の右隣にいらっしゃるの、村岡嗣政山口県知事です。周南市では、公用車に燃料電

池自動車を導入しました。現在、民間も含めて10台程度の燃料電池自動車が市内を走っております。南は瀬戸内海、北部には中国山地。四季折々に表情を変える中山間部があります。冬の使者ナベヅルも中山間地域の一員です。

さて、本日お話しさせていただくツルの里、八代地区は、本市中心部から北東約20kmに位置する中山間地域で、人口は351世帯、737人。三方を山に囲まれた標高約320mの盆地です。地区全域が「八代のツルおよびその渡来地」として、昭和30年に国の特別天然記念物指定を受けていて、ここでツルと人が共に生活をしています(図-3)。

ツル保護の歴史を振り返ってみますと、明治維新以降、全国各地でツルが捕獲されるなか、八代

地区では村人が申し合せ、捕獲を禁じ、ツルを守り続けました。地区内には村人が死んだツルの墓があります。明治20年に、他の村からやってきた猟師がツルを鉄砲で打つという事件に端を発し、村人の請願により、県の条例によってツルの捕獲が禁止されました。このことから、周南市八代地区は、近代日本の自然保護制度発祥の地と言われています。明治以降、ツルのために落ち穂を拾わずに残す、米の作付けや収穫を早くする、冬場はなるべく田に入らないといった、ツルと共生する独自の文化が形成されました。しかしながら、昭和15年の355羽をピークに、近年渡来するツルの数が年々減少しておりまして、昨年度は11羽のナベヅルの渡来という状況になっています(図-4)。

本市では、文化庁や山口県からの協力を得ながら、ツルの越冬地を守るための保護の取り組みを行っています。主な取り組みとしては、ネグラ等の環境整備、デコイの設置、保護ツルの移送および放鳥の3つです(図-5)。本市では、ツルの越冬環境として重要なネグラと餌場の維持および改善に努めています。写真は休耕田を活用した田ネグラの状況です。ネグラにはこのほか、はげ山を整備した山ネグラ、ため池を利用したため池ネグラがあり、毎年、合計11カ所の維持管理に努めてい

平成27年8月4日  
液化水素ステーションオープン 共に。周南市



図-2

ツルの里 周南市 八代地区



図-3

ツル保護の歴史



図-4

ます。ツルは、山あいの、水が豊富で凍らない田ネグラを主に利用しています。田ネグラは、現在、ほぼ市が買い上げ、耕し、水を張るとともに、周囲の雑木の伐採を行うなど、ツルが降りやすいように整備しています。こうしたネグラでは、大きな機械が入らない場所もあり、手作業も多くなることから、地域住民はもとより、全国より集まったボランティアと一体となって整備に取り組んでいます。

次に、餌場整備です。ツルの餌となる、米の作付や、ドジョウや水生昆虫を確保するためのピオトープを整備しています(図-6)。ツルの餌場は、市で管理するもののほか、地域の方にツルの渡来期間に田んぼを提供してもらい、5カ所程度を整備し活用しています。餌場は、ツルが日中の大半を過

ごすことから、ネグラ同様の維持管理を行っています。年間を通して環境整備の作業をしていますが、ツルが渡来する前には地元保護団体の主催で一斉整備を行っています(図-7)。今年は、10月3日に行われ、県内外からボランティアや小学校の児童など、約200人が参加し、ツルを受け入れるため汗を流していただきました。また、ボランティア以外にも、多くの企業や個人の方から、本市や地元のツル保護団体に寄付をいただき、環境整備に役立っているところです。

次に、デコイの設置についてです。デコイは、もともと猟で使われるおとりのことですが、本市では、平成10年から、上空を飛ぶツルの誘因と、ツルの引き止めの2つの目的で設置しています。製作は、現代の名工に認定されている内山春雄さんによるものです。現在、30体ございまして、地区内5カ所に分散して配置しています。このナベヅルのデコイは、このとおり非常にリアルに作られていて、ツルを見学に来られた方が本物と見間違えるほどであります。写真は実際の設置状況ですが、このなかに本物のツルが2羽います(図-8)。どれか分かりますでしょうか?デコイの設置は、とくに、引き止め効果の面で大きな成果を上げています。近年の渡来数減少の原因のひとつに、ツル同士の縄張り争いによる飛び去りが挙げられます。このため、平成2

ツルの里の再生に向けて・・・  
～周南市のツル保護の取り組み～



図-5

環境整備の取り組み・・・  
餌場整備



図-6

環境整備の取り組み・・・  
地域一体となった整備



図-7



2年度から、八代への引き止めを目指し、デコイの設置方法を変更しました。この結果、縄張り争いに負けても八代に留まるツルが増え、昨年度は9年ぶりに2ヶタ、11羽の渡来数を記録しております(図-9)。

3つ目の取り組みとして、出水市さんのご協力のもとに、平成18年より行っております保護ツルの移送および放鳥について紹介いたします。この事業は、渡来数回復のため、出水市さんで保護されたナベヅルを八代に移送し、一定期間飼育した後放鳥するものです。これは世界初の試みとして行われまして、平成19年3月以降、これまでに15羽のナベヅルを放鳥しています。

本市では、ツルの治療の拠点施設として管理

棟と4つの飼育ケージを有するツル保護センターを整備しています(図-10)。保護ツルの受け入れ、飼育および放鳥はここで行われます。放鳥は、ツルの羽の状態や体調などを考慮するとともに、過度の負担を与えない方法で行っています。今のところ放鳥した一部のツルは八代に戻らず出水市で確認されていますが、いずれは八代に戻ってきてツルの渡来数回復に繋がるものと期待をしています。

さて、ここまでは八代のツル保護の歴史や環境の整備についてご紹介しましたが、もうひとつ、重要なこととして、地域の振興に向けたツルの保護と農業の関係をお話しなくてはなりません。これまでお話したとおり、ツルが日中使う場所は水田です。稲作を中心とした地域の農業を守ることがツルの越冬環境を守ることに繋がります。しかしながら、八代地区も他の中山間地域と同様に高齢化が進んでいて、農家の後継者不足から、農地の荒廃が心配されていました。こうした現状を踏まえ、平成4年度から、県営事業としてはほ場整備を行い、農地の保全に取り組んできました。左側の写真は、ほ場整備前、右側は、ほ場整備後の様子です(図-11)。水田面積が大きくなったことから、大型の機械が導入できるなど耕作の省力化が図られるようになりました。

デコイの設置



図-8

デコイの設置による取組

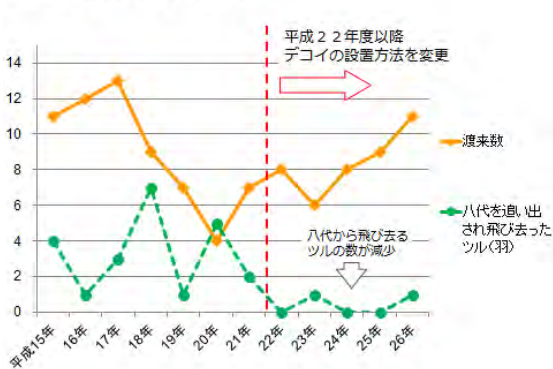


図-9

保護ツルの移送・放鳥・・・  
周南市八代ツル保護センター



飼育ケージ：3棟、飼育・放鳥ケージ：1棟、管理棟：1棟  
を有する野鳥治療の拠点施設となっています。

図-10

このほ場整備の工事では、ツルの生態に最大限配慮しながら作業を行いました。たとえば、餌場付近の水路では、コンクリート水路でなく、ツルの餌となる水生昆虫やドジョウなどの生物に配慮した多自然型工法を用いた水路を導入しました(図-12)。そのほか、ツルに影響のない工期設定や、ツルの歩きやすい法面傾斜の採用などがなされました。ほ場整備後には、農業を支えるための担い手の育成や、ツルにやさしい農業を目指す、農事組合法人ファームツルの里が設立されました。また、農業を引き継ぐために八代に帰ってきた娘さんもいますし、遠くは神奈川県から八代の農業を支えるためにやってきた若者もいて、心配されていた農業の後継者不足も徐々に解消に向かってい

ます。また、農業の基盤整備が整ったことで、ツルの生息環境を保全するための農法の検討も行われました。平成18年に、農業団体やツル保護団体によって八代地区自然再生協議会が結成され、兵庫県豊岡市さんで行われているコウノトリ育む農法を参考に、冬期湛水栽培が導入されました。現在一部の水田で無農薬・無化学肥料による作付も行われています。

こうした取り組みにより米の価値を高めることで、たとえば、農事組合法人の作るブランド米「つるの里米」は高値で販売されています(図-13)。八代産酒米を使用した「かほり鶴」というお酒もあります。このお酒は、イギリスで開催されたインターナショナル・ワイン・チャレンジ2014のサケ部門で銀メダ

ツルの保護と農業  
八代地区のほ場整備



図-11

ツルの保護と農業  
高付加価値な農産品



図-13

ツルの保護と農業  
ツルに配慮したほ場整備



図-12

周南のナベツルを生かした環境教育  
周南市立八代小学校の取り組み



図-14



ルを受賞しました。このように、ツルと共生するコメづくりは高い評価を受け、地域の活性化にもつながっています。

紹介したような、ツルと共に歩む農業によって守られてきた豊かな自然環境は、ツルを題材として地区内外の子どもたちが、環境を学ぶ重要な場として活用されています(図-14)。たとえば、地区内の八代小学校では、地域と連携をしながら、ツルの保全活動に関わっており、デコイの設置を行ったり、ツルの観察を新聞にまとめた「つる日記」の発行など、ユニークな活動を行っています。今年度の八代小学校の児童数は全部で15人だったと思います。こうした活動が評価され、平成24年には、内閣府の社会貢献青少年表彰を受賞しています。八代では、ツルの生息環境調査を行う「ツルの里生きもの研究会」というグループもできました。この研究会が主催し、市内の子どもたちと一緒に生きもの調査を実施するイベントも行われています。周南市の全域から多くの子どもたちが集まっています。こうした取り組みを通して、ツルの保護の様子や、八代地区のことを学んでもらえるとともに、地域の賑わいにも繋がっています。

最後に、ツルと『共に』歩む里の未来に向けた取組について紹介いたします。八代地区では、平成23年度に、地域住民の手により「八代地区夢プ

ラン」が作成され、地域をあげて活性化に取り組んでいます(図-15)。この夢プラン実現のために、ツル見学に来られた方に対して地域の農産品を販売したり、また、地域を活性化しようという試みを、地域コミュニティが中心となって取り組み始めています。

また、八代の生きものを見るだけでなく、その生きものを育む農業について勉強し、さらに八代で収穫された作物を実際に食べてみるという試みが、八代の若手農家と先ほど紹介した「ツルの里生きもの研究会」とのコラボレーションで、今年スタートしました。

こうした取り組みを進めることにより、一旦は衰退してしまった中山間地域のきずなやつながりがより深まることで、地域経済も徐々に活性化しつつあります(図-16)。ツルと共に生きる八代の里の取り組み、これは極めて小さな挑戦ではありますが、環境の時代にふさわしい地域創生のひとつのあり方であると考えております。

ご清聴ありがとうございました。

ツルと「共に」歩む里の未来に向けた取り組み



図-15

ツルと「共に」歩む里の未来に向けた取り組み



図-16